



特別賞 紀伊國屋書店賞

岡本敏子著『岡本太郎に乾杯』（新潮社 2002）

（中央新書・文庫コーナー：新潮文庫 お-55-1）

商学部 4年 勝俣翔多

戦後、日本美術界に挑戦状を突きつけ続けた一人の芸術家がいた。彼の功績は、私たちの心に深く刻まれている。芸術家といえば多くの人が、奇抜な風貌に型破りな言動といった少しぶっ飛んだ姿を思い浮かべるだろう。そんなイメージを初めて大衆向けに作った人物。あるいは大衆が「芸術家とはこうあってほしい」と思う分かりやすい像を具現化した人物。それこそが岡本太郎であり、芸術のレベルを一般大衆にまで引きずり下ろしたのである。

本書は岡本太郎が戦後、既存の日本美術界に戦闘を仕掛けながら突き進んでいく姿を語った作品だ。日本画壇の陰気で固定化されたピラミッドを叩き潰す。そして、芸術をより身近なものとして大衆生活の中に吹き込もうと孤軍奮闘していく。それは決して悲壮でも、深刻がってもおらず、実に明朗で無邪気に描かれている。

本書の特筆すべき点はなんといっても、その臨場感にある。太郎の辿った足跡を間近で追体験するような臨場感に溢れ、鮮明に読者へと訴えかけてくる。太郎がフランスを去るときに体が引き裂かれる思いや、旧東京都庁の壁画が解体されるときに物言わぬ後姿も、その場に居合わせたかのように映し出す。いわば、スクリーンで映画を鑑賞しているかのような迫力と、太郎自ら筆を執ったかのような生々しさが、本書の中を渦巻いているのだ。

というのも著者である岡本敏子は、太郎の秘書として行動を共にし、後年、彼の養女となる人物だ。彼女は太郎にびったり寄り添い、そして太郎自身も、傍らに彼女がいないと不安になるくらい、常に一緒だった。もはや岡本敏子は太郎の一部であり、運命共同体であったのだ。

彼女が本書、延いては岡本太郎を通して私たちに伝えたかったこととは、一体何なのか。それは己の意思を貫く生き方であろう。安全か危険か。どちらかと言われたら、太郎は敢えて危険な道を選び、闘い続けた。四面楚歌だろうと、周りから何と言われようとその道を突き通した。そうやって太郎は己の中で情熱を燃やし続け、その瞬間瞬間にそれを爆発させて生きてきたのだ。

馴れ合うのではなく、ガンガンと相手とぶつかりあい、闘う。本書で語られる岡本太郎のその姿こそ、己の意思を貫く生き方なのだ。今、世界中で多くの人が挑戦状を突きつけ、闘っている。アラブで起こる騒乱も、「反原発」「脱原発」と訴える声もすべて己の意思を貫く闘いだ。それらが将来、功績として残されるのか、否か。まだ誰にも分からない。唯一言えることは、闘わずして、真の調和と変化は訪れないということ。彼または彼女が生きていたら、今の世界から何を感じるのか。そして、何を残すのだろうか。本書を通して、猛烈に二人に会いたくなった。